

京都府埋蔵文化財情報

第133号

共同研究 弥生時代後期における有孔鉢の検討	
—京都府出土資料を中心として—	桐井理揮・菅博絵・岡村美知子----- 1
共同研究 帯金式甲冑成立段階における短甲の基礎的研究	
—方形板革綴短甲と長方板革綴短甲—	藤井陽輔・伊賀高弘----- 11
平成29年度発掘調査略報	-----21
3. 月出遺跡	
4. 女布遺跡	
5. 芝山遺跡第17次(G・H地区)	
6. 小樋尻遺跡第3次	
長岡京跡調査だより・129	-----25
現地公開状況(平成29年10月～平成30年1月)	-----27
普及啓発事業(平成29年10月～平成30年1月)	-----28
関西考古学の日関連事業「秋の考古学講座」	-----30
センターの動向(平成29年10月～平成30年1月)	-----33

2018 年 3 月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

弥生時代後期における有孔土器の検討

－京都府出土資料を中心として－

桐井理揮・菅 博絵・岡村美知子

1. はじめに

弥生時代後期から終末期にかけて、畿内地域では、底部に一孔を有する鉢形の土器の出土量が増加する。この土器の多くは①底部に径1 cm前後の穿孔を有すること、②体部の成形、調整が他の土器に比して粗雑であること、③当該期の集落遺跡から一般的に出土すること、などの共通点を指摘することができる。このような、いわゆる「有孔鉢」はこれまで甗と考えられることもあり、弥生時代後期には焼成前穿孔の鉢が出現するととらえられてきたが、実際にはその用途や使用目的、あるいは分布、出現から展開・消滅の過程すら明確に整理されてこなかった。

本論では有孔土器が多出することが知られている京都府の資料を中心に据え、有孔土器の出現、展開、および分布の粗密を整理し、その位置付けを考えてみたい。

2. 有孔土器をめぐる研究史の整理

まずはこれまでの弥生土器研究の中で、有孔土器がどのように位置づけられてきたかを、やや詳細に整理してみることにしよう。

弥生土器の一器種に過ぎない有孔土器であるが、その認識は意外にも古い。底部に穿孔を持つ土器に関して初めて言及したのは樋口清之である。樋口は有孔鉢の集成を行うとともに、有孔鉢は漏斗として使用されたと考えた。^(注1)

それに対して、山内清男や森本六爾は有孔鉢が甗として使用されたと考えた。山内清男は、弥生時代が農耕社会であったことの根拠として、籾殻圧痕や貯蔵穴、大陸系磨製石器などの農耕具とともに、有孔鉢、すなわち甗の存在に着目した。^(注2)翌年、森本六爾も同様に農業発展に係る1要素として有孔鉢を位置付けている。^(注3)そして、蓋の型式変化が農業の複雑化に伴う機能分化を反映すると考え、「飾られぬ汚い蓋」の中で中央に貫通孔のあるものは、蓋、甕、有孔鉢の「三者合わせて初めて一の完成した穀物の蒸器－セットのこしき－を形成した」と結論付ける。^(注4)森本の研究の中では、1932年の段階ですでに有孔の土器に関する言及がみられ、この器種に対する関心の高さを垣間見ることができる。これらの議論は、弥生時代は農耕を行う社会段階であり、朝鮮半島の事例からみると農耕を行うからには甗があつてしかるべきである、という素朴な図式の上に成り立っているが、その後の有孔土器に関する認識の基礎をなす研究であったといえる。例えば、『日本考古学講座』で、弥生時代の「衣・住・食」の項を執筆した後藤守一は、甕の底部に穿孔を持つ土器を甗として記述している。そして、甗は弥生時代前期から存在し、コメを調理する際に用いられたと説く。^(注5)後藤は1941年の段階では「有孔鉢＝甗」説には、弥生時代前期の土器の中

に有孔鉢が含まれないことを理由に懐疑的であったが、甕の底部に焼成後穿孔したものを有孔鉢と同様の機能を持つと考え、再論したものと考えられる。甕の底部に穿孔を持つものと有孔鉢との関係について言及したのは、この後藤の論が初出であると考えられ、「有孔鉢＝甕」、「底部穿孔甕から有孔鉢への変化」という図式はこの段階で成立したといえるだろう。

また、このような研究の中で、有孔土器が農耕社会と密接に関連する一資料として、縄文農耕論と結びつき、その根拠のひとつとされたことは看過できない。武藤雄六は、縄文時代中期にみられる有孔土器を甕として認識し、縄文時代における農耕の存在を証明しようとしたのである。^(注6) この意見に対しては、縄文時代にみられる有孔鉢は縄文時代の間に消滅し、弥生前期に見られるものは焼成後穿孔の甕と直接関係するものではないとするまっとうな反論があるように、無批判に甕と認定するのには賛成できない。しかし、縄文時代に焼成前穿孔を施した鉢形の土器が存在するという事実は留意されてもよいだろう。

1960～70年代には、有孔土器が甕であることを容認する論がある一方、それに対する疑義も提示され、再検討が進んだ。^(注9) 特に木下正史の研究は、弥生時代前期から古墳時代における列島各地の有孔土器を概観し、①孔の在り方、②本来的な用途であったか、2次的な転用か、③容量、④他の調理具との比率、⑤釜子の存在、⑥使用痕、という6つの要素から緻密な検討を加えたものであり、これらの研究の到達点として評価できる。そして、弥生時代の有孔土器が甕として使用されたことは否定しないものの、弥生時代の段階では調理の主体はなしえなかったと結論付けた。^(注10) 同様に「有孔土器＝甕」説に疑義を呈した佐原真は、^(注11) その後の研究の中で、甕を転用した底部穿孔土器も、有孔鉢と交代するように共に消滅することから、有孔鉢と底部穿孔甕は同様の用途を持っていたとし、これを「漉し器」とみる。そして、底部穿孔された甕が水田稲作の普及とともに西日本に広くみられるようになることを根拠として、「有孔鉢で濾過した内容物を小型深鍋で受け、有孔鉢を外した後に加熱する」という使用状況を想定し、酒造りに使用したと論ずる。^(注12) ただし、後述するように、甕の底部に孔を持つものと有孔鉢の型式学的連続性は必ずしも認められず、この点に関しては再検討が必要である。一方、同じように底部に孔を持つ土器の集成、分類を行った堀田啓一は、縄文時代には初原的な甕が登場し、地域的、時期的偏差を持ちながら古墳時代まで発展していくととらえた。堀田は器形ではなく孔の有無に着目して有孔土器の連続性を論じており、^(注13) 研究者間でも意見の一致を見ていない。

このように様々な言及がなされたが、一遺跡からの出土量がそれほど多くないことに加え、検討可能な属性も少なく、明確に使用方法を示す出土状況も見られなかった。そのため有孔鉢は編年表や器種分類図のなかには必ず登場するものの、90年代以降はそれ自体を取り扱った研究は極端に減っていった。他方、詳細にコメ調理の方法が研究され、より実践的な方法論で食文化の復元が行われるようになった。小林正史の一連の研究の中でも詳述されておらず、佐原真の研究に依拠しつつ漉し器であると述べるにとどまっている。^(注14)

一方、古墳時代における甕の型式とその受容過程が整理され、弥生時代の有孔鉢に関しても、古墳時代における甕の研究の観点から言及されるようになった。^(注15) 杉井健は古墳時代の甕を検討す

る中で弥生時代後期の有孔鉢にも触れ、東日本においては焼成前に穿孔を施す小形の有孔鉢が古墳時代の小形甕の祖型となるという見通しを述べている。焼成前穿孔が施された専用器種であることを重視し、弥生時代における甕の存在は否定しないものの、有孔鉢の法量の小ささと出土数の少なさから、根本的な調理様式の変化は竈や把手付き甕が大陸からもたらされた古墳時代中期を想定している^(注16)。

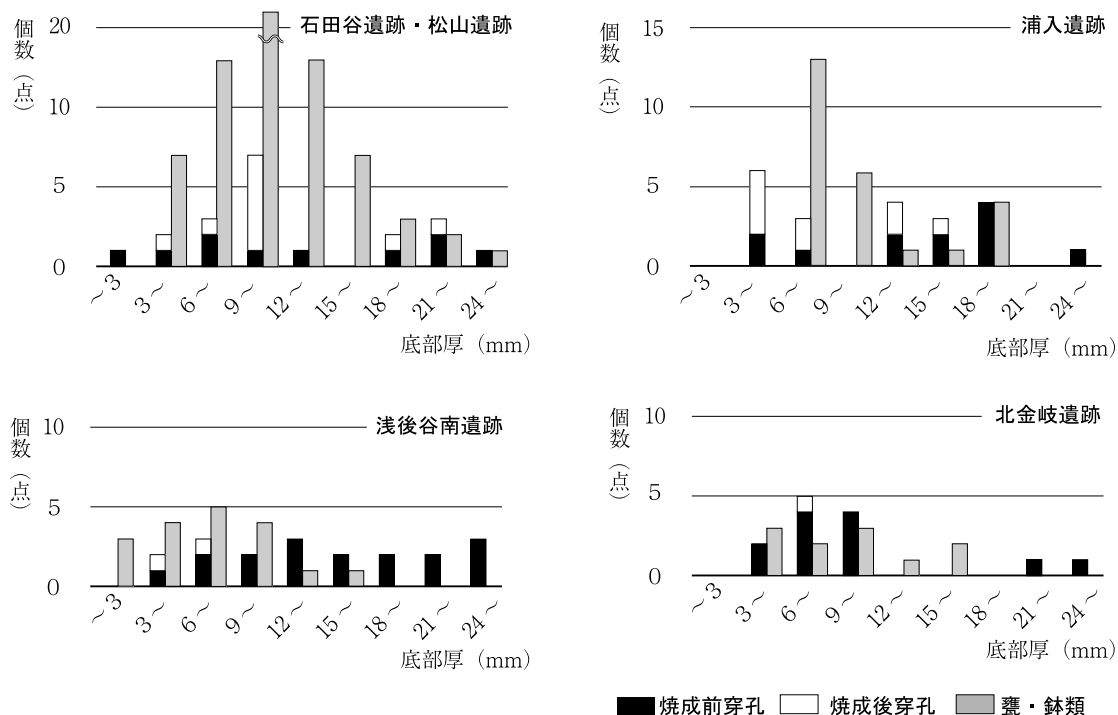
以上、有孔土器について触れた研究史を概観したが、その評価に関してはいまだに1970年代の研究成果によるところが大きいといえる。さらに、弥生時代の有孔土器自体を詳細に検討したものは、木下の優れた研究があるものの多くはなく、論点は主に用途論に重点が置かれている。そのため、古墳時代以降の甕との比較検討、あるいは容量に関しては検討がある程度行われているものの、土器自体の詳細な観察に基づいた検討や、出現から消滅に至る過程、もしくは分布の粗密など基礎的な情報も整理されていない。

そこで、本論ではまず、検討の軸足を京都府の資料とし、各地で一定のまとまりのある資料群を抽出し数量の比較を行うことにしよう。京都府は赤塚次郎が「有孔鉢が大量消費される」と指摘するほど有孔鉢が多出する丹後地域を擁する一方、南部では典型的な畿内地域の土器様相を示し、地域間の比較に適していると考えからである。次に、周辺諸地域を含め各地での有孔土器の型式について整理し、その分布の粗密や、出現・展開・消滅の過程を明らかとすることを目的とする。

3. 有孔土器の分類

まず、有孔土器の型式分類を行うことから始めることにしよう。有孔土器は特徴的な器形をもち調整方法も多様であるが、最大の特徴は「孔を持つ」ということであり、その点が使用に係る第一義的な要素であるといえよう。しかたがって、分類にも孔のあり方が反映されていることが望ましいと考える。研究史にかんがみても、孔が焼成前か後かという視点は、有孔土器が製作時から何らかの専用器種としての用途を意図されていたかどうか、ということに関係するとして、第一義に掲げられてきた。本論でもまずは穿孔が焼成前か、焼成後か、という視点でまずは大別することにしよう。^(注18)

今回、実見することができたものの中で、焼成前の穿孔方法には、土器の内外面から、あるいは両側から ①棒または管状の道具で刺突穿孔する方法、②錐またはヘラ状の道具で削り抜くように穿孔する方法が考えられる。しかし資料の中にはその差異が明確でない資料が含まれるため、本論では、両者を合わせて焼成前穿孔とする(写真1)。弥生時代後期には焼成前穿孔の鉢が出現することが知られているが、今回実見した弥生時代後期の有孔鉢の中には焼成後穿孔の資料も確認することができた。その穿孔方法としては、内面または外面のいずれか一方から、あるいは両側から錐状の道具によって回転穿孔する方法と(写真3)、両側から叩打することによって穿孔する方法(写真4)を確認した。ここでは、前者を焼成後回転穿孔、後者を焼成後叩打穿孔というように呼称しておこう。有孔土器及び甕・鉢類の底部の厚さに注目したとき、焼成後に穿孔される



第1図 有孔土器と甕・鉢類の底部の厚さ

ものはおおむね甕・鉢類の底部の厚さと分布域が重なるのに対し、焼成前穿孔を持つものは甕・鉢類の底部と同じ厚さのものと、底部がより厚く作られたものが認められる(第1図)。後者の存在は専用器種成立の目安になりえる要素であると考え、第2図の分類にも反映させた。

また、器形は以下のように7種に大別した。

〈A類〉底部から口縁部まで外方に直線的に広がり、逆円錐(台)形の器形を持つものの中で、器高がおおよそ12cm以上の大形のもの。平底のものをA1類、尖底のものをA2類と細分する。

〈B類〉口縁部がやや内側に屈曲し、胴部最大径と口縁部径がほぼ同じ、ないし胴部最大径が口縁部径を凌駕するもの。口縁部径は器高と比して小さく、縦長の砲弾形を呈する。丹波以北では甕の体部と共通する器形となるものもある。

〈C類〉底部付近がすぼまり、漏斗形を呈するもの。

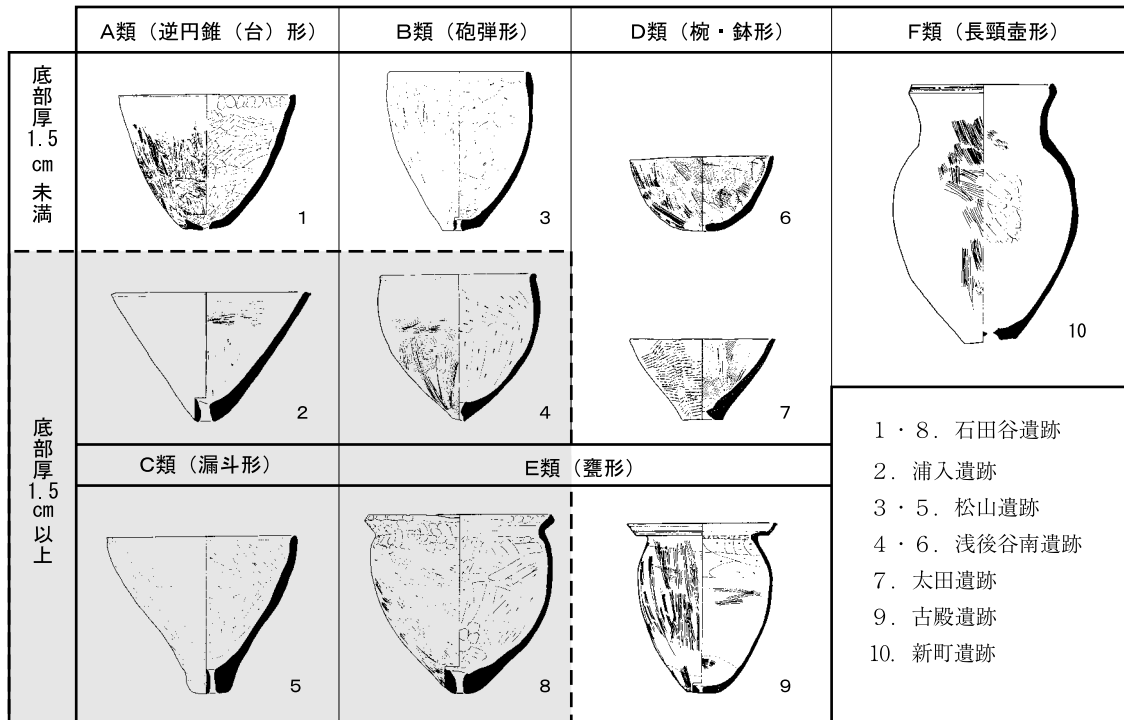
〈D類〉単純な碗形ないし鉢形を呈するもの。甕の体部下半と共通する器形となるものが多い(D1類)、器高がおおよそ12cm以下を基準として、A類と分別する。口縁部がつくもの(D2類)、脚台がつくもの(D3類)等のバリエーションがある。

〈E類〉明確な口縁部を持ち、甕形を呈するもの。体部が厚く粗雑で製作時から明らかに甕と乖離したものと(E1類)、甕と同じような器形を持つもの(E2類)がある。

〈F類〉長頸壺形を呈するもの。

〈X類〉その他の器形を持つもの。

これらの土器の地域的・系統的な違いを反映する属性として、器面の調整技法をあげることができる。特に、畿内地域の弥生時代後期の土器様式のなかでみられる有孔鉢は、甕・鉢類の成形途上品を転用したD類に相当するものが多い。これらは体部下半にタタキを残すなど、丹波以北



第2図 本論における有孔土器の分類(1/8)

のものとは調整技法が大きく異なっているが、甕・鉢類の体部下半と共通した形態と成形を持つという点は共通する要素であると考え。今後、細分の可能性を残しておきたいが、本論では成形技法に関わらず、同じ分類の中でとらえておきたい。また、墳墓に伴う土器の中には底部あるいは体部に焼成後の穿孔・打ち欠きを持つ土器が多く認められるが、今回議論の俎上に載せたい有孔土器とは本質的に性格を異にするものと考え、検討資料からは除外した。

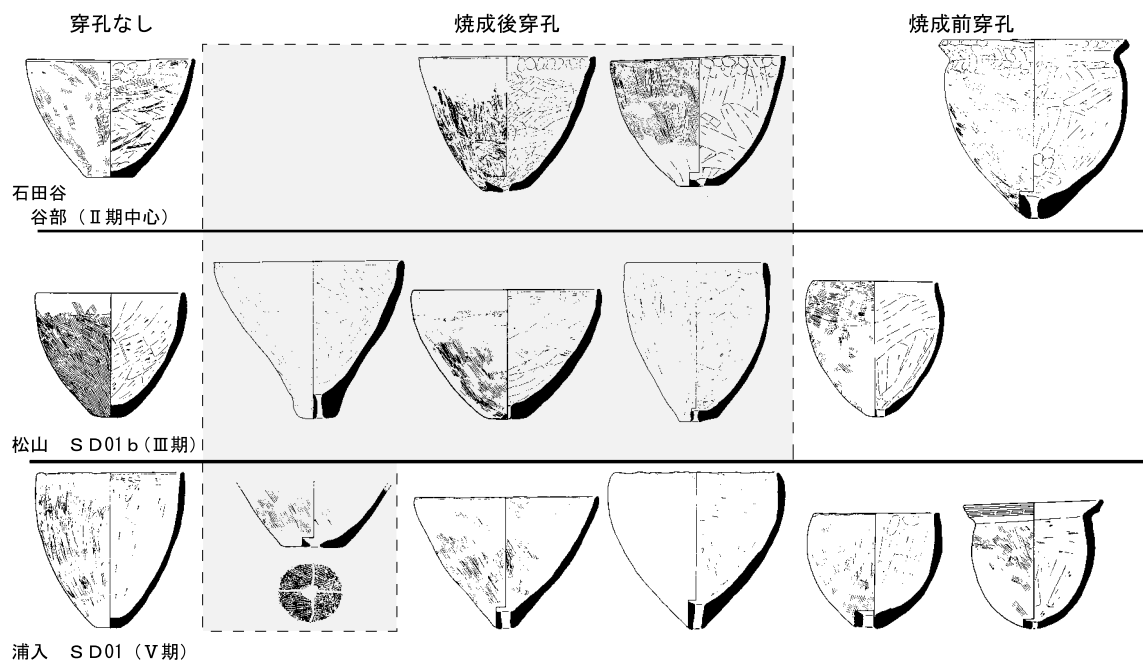
4. 京都府内の様相

以上の分類のもと、京都府内の様相を概観しよう。丹後では後期から終末期を大別4段階12期に細別した精緻な編年が示されているが、丹波地域では当該期の土器編年はいまだ不安定である。したがって、丹波以北に関しては、高野陽子^(注19)が示した時間軸を基準にして後期をⅠ～Ⅳ期の4段階、終末期をⅤ～Ⅵ期の2段階と古墳時代前期初頭のⅦ期に区分し、比較を試みる。また、山城地域の編年は佐山遺跡^(注20)で示された編年案に依拠し、同様に後期を4段階、終末期を2段階に区分する。

(1) 丹後地域の様相

丹後地域では、後期末から終末期に多量の有孔土器が出土するようになり、その型式も多岐にわたる(第3図)。以下では今回実見した結果に基づき、有孔土器が多量に出土した遺跡の様相について整理してみることにしよう。

石田谷遺跡 谷部から完形率の高い土器が多量に出土した。その中には朱塗りのものも含まれ、報告者は上流域での祭祀行為の可能性にも言及している。後期中葉以降に時期が下るものも含まれ、層位的にも一括性を欠くが、丹後では類例の少ない後期前葉の集落出土資料である。有孔土



第3図 丹後地域における有孔土器の穿孔方法と器形のバリエーション

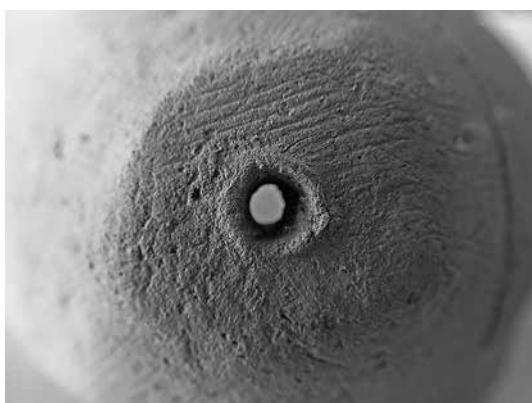


写真1 焼成前穿孔(松山遺跡)



写真2 焼成後穿孔途中(浦入遺跡)

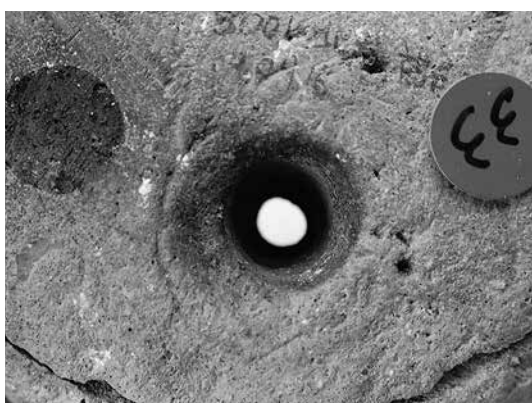


写真3 焼成後穿孔(松山遺跡)



写真4 焼成後叩打穿孔(松山遺跡)

器は完形のものが3点出土しているほか、孔を持つ底部のみの破片も20点以上を確認することができる。器形がわかるものとしてはA類が2点、E類が1点ある。この中で、A類はいずれも焼成後に穿孔されたものであることは注目される。同様の器形で孔を持たない鉢が数点出土してい

るが、器面の調整が粗く、口縁端部の成形が粗雑である点では孔を持つものに類似している。同形の鉢を有孔鉢として使用した可能性も考えられよう。資料の一括性には問題が残るが、これらは後期前葉の初現的な様相の有孔鉢である可能性も考えておきたい。

松山遺跡 溝S D01bからⅢ期を中心に完形率の高い土器が多量に出土した。報告者によると、溝肩にまとまって土器を投棄したとされ、底部に穿孔を持つものは破片数にして40点以上確認している。先述の石田谷遺跡と同様に、焼成後穿孔を施したものも含まれており、器形が分からないものも含めると、焼成後に穿孔されたものと焼成前に穿孔されたものの比率は35:65になる。焼成後穿孔をもつものはB類に多く、底部厚を見ても甕・鉢類と優位な違いは認められない一方で、焼成前穿孔を持つものは明らかに甕・鉢類の底部厚を上回るものが多い。器形もB類やD類のように、前段階では見られなかった専用の器形を持つものが含まれる。

浦入遺跡 S D01から終末期古相(V期)の土器が数か所にまとまって土器が出土した。その中には完形率の高い土器も多く含まれ、土器を用いた儀礼的な行為が行われた可能性も考えられる。有孔土器で器形がわかるものはA・B類が10点あり、そのすべてが焼成前に穿孔されたものである。第1図を見ると、A・B類の中でも当初から底部が厚く作られ、有孔土器の専用器形と考えられるものが後期段階と比べて増加しており、この時期が焼成前穿孔をもつ有孔土器が土器組成の中に完全に定着した段階と考える。一方、器形がわかるものはないが、底部が薄いものの中には、焼成後に穿孔されたものも有孔土器の中の3割程度は認められる。穿孔途中でやめたものも存在することから(写真2)、その背景は不明ながら、V期までは一定数の焼成後穿孔のものが存在すると考えておきたい。また、この中には底部に十字の線刻を有するものがあることは留意される。同じような土器は若狭湾沿岸でも出土しており、これらも当初から有孔鉢に「転用」する目的が付されていたと考えることも可能であろう。

浅後谷南遺跡 終末期から古墳時代前期前半(V~Ⅶ期)にかけての土器が各遺構から一括で出土した。有孔土器も多く得られているが、焼成後に穿孔されたものの割合は著しく低くなり、ほとんどすべてが焼成前に穿孔されたものである。また、その型式は前段階のように多岐に及ぶのではなく、ほぼA・B・D類に収斂しており、法量も前段階と比較すると小形化する。前段階で定着した有孔土器が変質しつつも安定して見られる時期である。

このように、特定の遺構から多量に出土するのが丹後地域の特徴であるといえるだろう。石田谷遺跡や松山遺跡の様相にかんがみると、有孔土器が組成の中に加わるのは大山式前~中葉(Ⅱ期)であると考えられる。出現当初には焼成後に穿孔を行うものも一定数見受けられることから、中期までに認められる甕の底部に孔を穿つものとの関連も想起されるが、現状では型式学的にそのことを傍証することができる資料は得られていない。また、松山遺跡では甕・鉢類の中で約25%もの比率を占め、中期と比べて量的な飛躍が大きく、ただちに同じ用途を想定することは難しいと考える。

集落の数が増加する後期後葉には多くの遺跡で普遍的に出土するようになり、V期の浦入遺跡S D01、V~Ⅶ期の浅後谷南遺跡でも高率で有孔土器が認められる。その一方で、林遺跡、裏陰

遺跡、途中ヶ丘遺跡など、竪穴住居跡が複数棟以上検出された大規模集落ではその比率は低く、報告書のなかで示されている比率に依拠するならば、その比率は5%にも満たないことになる。

また、浅後谷南3式の基準資料である同遺跡SK2003では依然高い割合で有孔土器がみられるが、古墳時代前期のまとまった土器資料はいまだ少なく、その消滅過程ははっきりとし^(注23)ない。

(2) 丹波地域の様相

丹波地域ではI期の良好な資料はないが、II・III期の桑飼上遺跡や今林遺跡でも有孔鉢は出土しておらず、先述の丹後の様相と比較してもその出現はやや遅れるようだ。有孔鉢が出現するのは後期後半あるいは庄内式並行期(IV～V期)であると考えられ、多くの遺跡から出土するようになる。この時期の土器組成が明らかになっている遺構として、松ヶ端遺跡SD97001や小西町田遺跡、太田遺跡SD98の様相を見てみると、全体に占める有孔鉢の比率は5%未満であり、甕鉢類中に占める割合も後述する畿内地域の様相と比較しても大きく異なることはない。また、器形をみても多くが単純な鉢形を呈するD類であり、太田遺跡のように、外面をタタキで成形した畿内地域的なものが主体を占める。

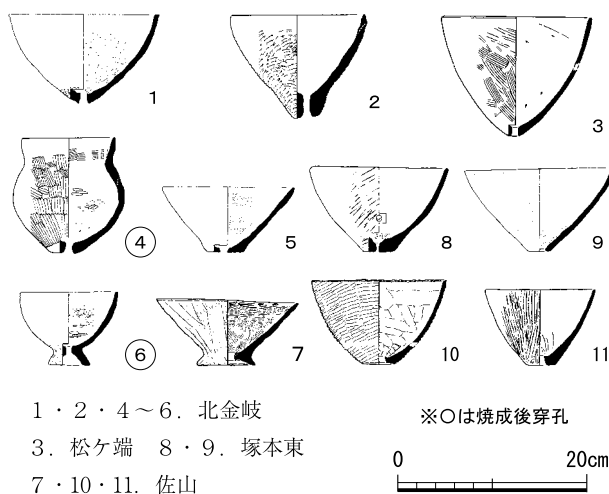
他方、点的ではあるが有孔鉢の比率が突出する遺跡も認めうる。桑原口遺跡では土器溜まりから、器形は不明ながら10点以上の有孔土器の底部が出土している。また、北金岐遺跡SD01では、甕・鉢類に占める割合は6%ほどであるが10点以上が出土しており、器形のバリエーションも豊富であり、やや注目すべきあり方を示す。この2遺跡は丹後の土器様式の影響が強くみられ、有孔土器の在り方にもその影響が反映されている可能性があるといえる。

(3) 南山城地域の様相

最後に山城地域の様相をみてみよう。100棟以上の竪穴住居跡が検出され、南山城地域の編年の基準となっている佐山遺跡では、有孔鉢は後期後半新相ないし終末期古相(佐山I-4～II-1期)に出現するものの、布留式並行期(佐山III期)には継続しないようだ。佐山I-3式の備前遺跡SD01でも4点の出土があることから、山城地域でも後期後半には出現すると考えられる。多くの遺跡で普通に認められるものの、その型式はいずれも焼成前穿孔されたD類であり、法量

も小形のものに限られる。また、土器組成に占める割合も、正確には知りえないものの、5%にも満たないものと考えられる。

いまひとつ、南山城の当該期の集落資料として塚本東遺跡出土土器をとりあげよう。塚本東遺跡では溝から後期末から終末期前半(佐山I-4～II-2期)にかけての資料が多量に出土した。ここでも有孔鉢は2点しか出土しておらず、その型式もいずれも焼成前穿孔を持つD類である。塚本東遺跡では甕や高杯の口縁部形態に近畿北部



第4図 丹波・山城地域における有孔土器の類例

系の製作技術の影響が看守されるが、丹後のように有孔土器が多出する状況は認められない。^(注22)

(4)小結

京都府内の有孔土器の出現と展開をまとめておくと以下ようになる。

① 有孔土器は丹後地域では後期前半新相に出現し、出現期には焼成後穿孔を持つものが一定数存在する。有孔土器の比率も、他地域と比較して著しく高率を示す遺構が存在する。

② 丹波・山城地域でも後期後半には出現し、集落遺跡からごく一般的に出土する。ただし、丹後と比べて器形のバリエーションは乏しく、鉢形、あるいは甕の成形途上品に焼成前穿孔を施したものが多数を占める。

③ 丹波以南では古墳時代に入ると有孔鉢は消滅する。丹後でもその量は著しく減少するものの、A類は古墳時代前期を通じて残存する可能性がある。

表は、府内において4点以上の有孔土器が出土した遺構を中心に、型式ごとの出現比率および甕・鉢類中に占める有孔土器の比率を示したものである。後期後半以降はどの地域でも有孔鉢は普遍的に存在するものの、丹後地域では器形のバリエーションも豊富であることは明らかであろう。また、各地域で有孔土器の容量を比較すると、丹後出土のものは、丹波・山城地域出土のものよりも1～2ℓほど大形

表 遺構ごとの有孔土器の出現比率

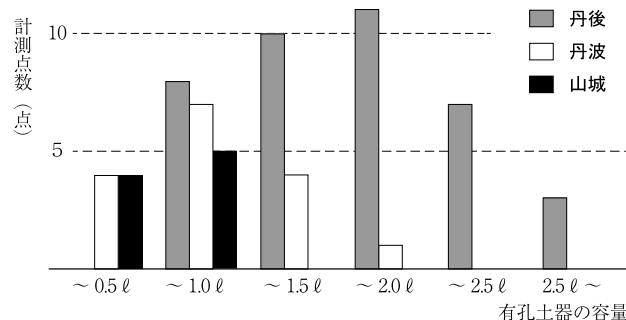
地域	遺跡	遺構	時期	類型								甕・鉢類中の割合(%)
				A	B	C	D	E	F	X	不明(※1)	
丹後	石田谷	谷部	Ⅱ～Ⅳ	2				1			20↑	—
	松山	SD01 b	Ⅱ～Ⅲ	3	5	1				1	31	24.3
	古殿	SD04	Ⅳ～Ⅴ	2	2			1				—
	途中ヶ丘	E区	Ⅳ～Ⅴ	1							3	3.2
	浦入	SD01	V	5	5			3			10	13.3
	裏陰	C1区	Ⅵ								3	1.7
	浅後谷南	SD2016	V～Ⅵ	2	3		2				2	12.0(※2)
		SK2003	Ⅶ	1	2		2					13.7(※2)
北丹波	桑原口	3次	Ⅳ								13↑	—
	小西町田	土器群	V		1		1				3	4.5
	松ヶ端	SD97001	Ⅳ～Ⅴ	1							4	6.8
南丹波	太田	SD98	Ⅳ～Ⅴ				5					—
	北金岐	SD01	V	6	3	1	4	2	1			6.1
	曾我谷	溝	Ⅵ	1			4					—
山城	備前	SD01	Ⅳ				4					—
	佐山		Ⅲ～Ⅵ				4				1	—

※1 不明は底部のみで器形がわからないもの

※2 報告書記載分からカウント

となる傾向も看守される(第5図)。したがって、そもそも両者の間では、有孔土器に求められる用途が異なるものであったと考えることもできよう。先述のように、丹後地域内でも有孔土器の出現比率は遺跡・遺構ごとの偏差が大きく、有孔土器が多量に出土する遺構は、土器が一括投棄されたと考えられるような遺構に集中する傾向が認められることは、その特殊な使用方法の一端を示しているといえるだろう。

今後、周辺諸地域の様相を整理し、府内の様相と比較してみることにしよう。



第5図 各地域の有孔鉢の容量

(きりい・りき = 京都府教育庁指導部文化財保護課、元当調査研究センター職員)

(すが・ひろえ = 当調査研究センター調査課企画調整係調査員)

(おかむら・みちこ = 当調査研究センター調査課調査第3係調査員)

- 注1 樋口清之「底部に一孔を有する弥生式土器」(『史前学雑誌』一の三) 1929。
- 注2 山内清男「弥生式文化と原始農耕問題」(『日本原始農耕』東京考古学会) 1933。
- 注3 森本六爾「農業起源と農業社会」(『日本原始農業新論』東京考古学会) 1934。
- 注4 森本六爾「煮沸形態と貯蔵形態－彌生式土器の蓋－」(『日本原始農業新論』東京考古学会) 1934。
- 注5 後藤守一「衣・住・食」(『日本考古学講座』第4巻 弥生文化 河出書房) 1955。
- 注6 武藤雄六「中期縄文土器の蒸器」(『信濃』第17巻7号 信濃史学会) 1965、中村孝三郎・寺村光晴「縄文文化に於ける甗様土器－特に越後発見の多孔底の土器を中心として－」(『考古学雑誌』42巻1号) 1956。
- 注7 堀田啓一「日本上代の甗について」(『日本古文化論攷』吉川弘文館) 1970。
- 注8 網干善教 1964「深草弥生遺跡の調査」(『龍谷史壇』第54号、注7に同じ、神沢勇一「かたちと用途」(『弥生式土器』日本の美術44 小学館) 1975。
- 注9 岩崎卓也「甗小考」(『信濃』第18巻第4号 信濃史学会) 1966、堅田 直「底部に穿孔のある土器」(『先史学研究』3 同志社大学先史学研究会) 1961、佐原 真「弥生土器入門」(『弥生土器』I ニューサイエンス社) 1971、木下正史「古代炊飯具の系譜」(『古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂) 1976。
- 注10 木下正史「古代炊飯具の系譜」(『古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂) 1976。
- 注11 佐原 真「弥生土器入門」(『弥生土器』I ニューサイエンス社) 1971。
- 注12 佐原 真「煮るか蒸すか」(『飲食史林』第7号 飲食史林史研究会) 1987。
- 注13 注7に同じ。
- 注14 小林正史編『土器使用痕研究－スス・コゲからみた縄文・弥生土器・土師器による調理方法の復元－』2011。
- 注15 杉井 健「甗形土器の基礎的研究」(『待兼山論叢』第28巻 大阪大学文学部) 1994、寺井 誠『日本列島における出現期の甗の故地に関する基礎的研究』公益財団法人大阪市博物館協会 大阪歴史博物館 2016。
- 注16 杉井 健「甗形土器の地域性」(『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室) 1999。
- 注17 赤塚次郎「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」(『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター) 2002。
- 注18 注10に同じ。
- 注19 高野陽子「北近畿における弥生時代後期前半期の土器とその時系列」(『京都府埋蔵文化財論集』第4集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001、高野陽子「丹後地域」(『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター) 2006、高野陽子「弥生後期土器の地域色とその系統」(『京都府埋蔵文化財情報』第107号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009。
- 注20 高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」(『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書 第33冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003。
- 注21 布留式中～新段階の幾坂遺跡では焼成前穿孔のA2類が2点出土している。
- 注22 塚本東遺跡と同様、近畿北部系土器が多くみられ遺跡は摂津や播磨でも見受けられるが、これまでのところ有孔鉢が多出する傾向は認められていない。

帶金式甲冑成立段階における短甲の基礎的研究

－ 方形板革綴短甲と長方板革綴短甲 －

藤井陽輔・伊賀高弘

1. はじめに

古墳時代前期は、倭国で鉄製の武具が出現した時期である。現在確認されている前期の鉄製武具として、頭部を守る武具である^{かぶと}冑の小札革綴冑、胴体を守る武具である^{よろい}甲の小札革綴甲、堅矧板革綴短甲、方形板革綴短甲、そして付属具である籠手などが確認されている。これらは「前期甲冑」^(注1)や、「前期型甲冑」^(注2)と称することがある。

「前期型甲冑」は出土数が総じて少なく、さらに全体像が把握できるほど良好に遺存する資料は限りがある。また、「前期型甲冑」は、「帶金式甲冑」^(注3)と呼ばれるいわゆる古墳時代中期に盛行する甲冑に連なるものと、隔絶する武具も多い。甲に関していえば、大量の小札を綴じて製作する小札革綴甲は技術的にみて舶載品とみられ、製作技術も隔絶する。一方、今回取り上げる方形板革綴短甲や堅矧板革綴短甲は、後に成立する「帶金式甲冑」と同様の製作技法が用いられることから、典型的な「帶金式甲冑」である長方板革綴短甲や三角板革綴短甲へ連なる型式と考えられる。

古墳時代前期中頃に出現する鉄製短甲は、古墳時代中期に帶金式甲冑が出現することで生産性を高めた型式が創出される。その前段階の短甲は方形板革綴短甲と呼ばれる形式で、鉄板が上下3段で、帶金がなく、裾板のないものが主流である。

本稿では方形板革綴短甲の研究を中心に、現在に至るまでの革綴短甲の研究史をまとめ、資料が増えつつある方形板革綴短甲およびその系譜を引く長方板革綴短甲の古式の資料を検討し、今後の研究の予察を行う。

なお、本共同研究は平成28年度の共同研究事業の一環として、方形板革綴短甲と長方板革綴短甲の資料調査を行ったものである。

2. 研究史

ここでは方形板革綴短甲の出土例と研究史を主要なものを中心に時系列を追ってに概観する。

はじめに方形板革綴短甲に着目したのは末永雅雄^(注4)である。末永は静岡県松林山古墳から出土した鉄板片を「カルタ鉄革綴製品」とし、それらが革綴しており、一角を円形や斜に加工したものや、細い鉄板を綴じつけたものがみられることに着目し、それらを武装具の一種と推測した。末永は同資料を短甲とは断言しなかったものの、各鉄板の反りと湾曲が少ないことから、全体としては直線的な板状を成すことを想定している。

その後、滋賀県安土瓢箪山古墳から出土した鉄板群を「堅矧板革綴作り」と評した。本資料は後胴脛上第1段が良好な状態で出土し、短甲であるという根拠に至ったと考えられる。この出土

例のもとに、末永は新たな型式である「鉄方形板革綴短甲」を暫定的に設定した^(注5)。ただし、この段階においても「鉄方形板革綴短甲」の全体的な形状は不明であった。

1950年代から60年代には、新たに奈良県和邇上殿古墳から2領の方形板革綴短甲が出土したことをはじめ、奈良県新沢500号墳や佐賀県熊本山古墳、福岡県稲童15号墳で比較的遺存状況が良好な資料が出土した。特に熊本山古墳出土例では初めて前胴が復元され、短甲としての全体像が明示された。

60年代末から70年代にかけて、これまでの資料増加をもって停滞していた研究が進展する。野上丈助は「長方形板革綴短甲の成立をもって「形式が統一」された」と評価し、その前段階にあたる「方形鉄板革綴短甲」には「形式の多様性」がみられることを提起した^(注6)。また、野上は「堅矧板革綴短甲」と「方形鉄板革綴短甲」は同じ型式のものが存在しないことを指摘するが、「長方形板革綴短甲」については「方形鉄板革綴短甲」に祖源を求められると評価している。

小林謙一は出土資料の再検討と甲冑の名称の整理などを行い、前期古墳から出土する方形板革綴短甲には付属具や冑が共伴しないことや、「形態が変化に富」むことを指摘した^(注7)。1970年初頭には福岡県若八幡宮古墳や京都府園部垣内古墳で方形板革綴短甲が出土し、報告されている。一方、甲冑研究自体は、野上・小林の論文報告以降から90年代までは低調であった。

1990年代に入ると滝沢誠による常陸狐塚古墳出土の方形板革綴短甲の報告を皮切りに、徐々に出土短甲の未報告資料の公表や再検討、それに伴う方形板革綴短甲の研究が行われる。それらは現在に至る方形板革綴短甲研究の根本といえる。滝沢氏は茨城県常陸狐塚古墳出土方形板革綴短甲の報告に伴い、方形板革綴短甲のみを対象とした研究を行った^(注8)。そこでは、①方形板の段構成、②方形版の枚数、③方形板の大きさ、④鉄板の重ね方、⑤引合板、⑥前胴上部の構造、⑦押付板の7つの属性を抽出して検討を行い、「基本的構造に関わる属性においても個体によって差が認められる」とした。それは方形板革綴短甲が、古墳時代中期の短甲のように「大量生産を指向した集中的な生産体制」が成立し、生産体制が確立する前段階の所産のためと評価している。滝沢氏の研究は、方形板革綴短甲に小属性を抽出した点で先駆的であったが、属性の結びつきをもって製品群の組列を設定するまでには至らなかった。

京都府埋蔵文化財調査研究センターによる京都府相楽郡木津町(現木津川市)瓦谷1号墳の発掘調査では、第1号主体部の盗掘孔から方形板革綴短甲と小札革綴冑が出土した^(注9)。本古墳での出土例のみが古墳時代前期の鉄製冑と鉄製短甲が共伴する事例となっている。本古墳出土例は後に検討が重ねられ、本例も基本的に同段どうしでの革綴による結合が行われ、後の革綴短甲との共通性が指摘された^(注10)。

出土後報告が進んでいなかった個体の資料化も徐々に増えていく。高橋克壽は大阪府紫金山古墳出土の堅矧板革綴短甲の検討を行い、後胴押付板や裾部の曲線や、古くみられる方形板革綴短甲の地板の配置が縦方向に並ぶことに着目し、堅矧板革綴短甲と方形板革綴短甲が同一の系譜であるとした^(注11)。そして、鉄加工技術の発展を背景に、押付板の枚数の変化や、地板の形状が縦長から逆台形を経て平行四辺形へ変化することなどから、堅矧板革綴短甲から方形板革綴短甲押付板

二段式、方形板革綴短甲押付板一段式と変遷することを指摘した。

橋本達也はこれまでの方形板革綴短甲の出土例を悉皆的に調査し、それぞれにみられる①押付板、②前胴構造、③地板配列、④地板枚数、⑤地板長幅比、⑥覆輪の諸属性から、特に①・③・⑤重視してAからEタイプの計5タイプを抽出した。^(注12) その変遷観は押付板の枚数の減少を指摘した高橋の変遷観を補強するものとなっているが、押付板形態のみで形式的位置づけが困難として、Bタイプを設定したことに注視すべきである。また、橋本は朝鮮半島南部で出土する縦長板釘結板甲(堅矧板鋌留短甲と訳す)と日本で出土する堅矧板革綴短甲・方形板革綴短甲との共通性・相違性から、「堅矧板革綴短甲・方形板革綴短甲成立の背景に朝鮮半島からの甲冑製作工人の渡来を想定できるが、その製品の独自性と発展性はその工人の渡来が継続的・長期にわたるものではなく(中略)ひとたび操業を開始した鉄製の甲作りは、その後独自の発展を続けることになったもの」と、列島での独自の発展と推測した。また、前述した松林山古墳出土の短甲が方形板革綴短甲でなく長方板革綴短甲であることや、旧来の出土短甲の模式図を作成するなどして、旧来の情報が一挙に更新されるにいたった。

前後するが、古谷毅は古墳時代の鉄製甲冑の製作方法や設計などを中心に多角的な視野で当時の研究課題などの整理を行った。^(注13) 古谷は古墳時代の甲冑のように各部品の仕様か所が規定され部位が入れ替えられないものを「割付系甲冑」とし、その中でも長方板革綴短甲などの帯金を有する甲冑を「帯金式甲冑」と名付けた。それに対比するように、成立以前の甲冑は「非帯金式甲冑」と命名している。「割付系甲冑」や「帯金式甲冑」は以降一般的な概念として定着し、甲冑製作を理解するうえでも重要な視座となっている。

以降、朝鮮半島での資料増加にともなう橋本達也による日韓の資料比較を軸とした研究や、^(注14) 帯金式革綴短甲の研究を進めた阪口英毅が、改めて前期の短甲や前期・中期の短甲の系譜について言及している。^(注15) 阪口は小林や古谷も指摘してきた同段における横方向の結合について、方形板革綴短甲の段階ですで行われている事例をみだし「帯金のように横方向に細長い部材を創出する下地が整ったもの」と評価している。^(注16)

そして近年では、京都府相楽郡精華町鞍岡山3号墳で方形板革綴短甲と長方板革綴短甲の両方の特徴をもつ革綴短甲が出土したことで、耳目を集めた。^(注17) 本資料の詳細に関しては後述する。

以上、研究史や出土事例などについてまとめた。研究史をかんがみると、方形板革綴短甲は、①堅矧板革綴短甲から発展し、長方板革綴短甲へと変遷していく、中間的形式として一連の系譜上に位置する。②個体ごとの差異が大きい、大きくみて2型式が存在し、それがおおむね新旧を表す。という評価が定着しているといえる。

3. 資料調査報告

前項では、方形板革綴短甲における研究の現状をまとめた。研究史を概観すると、方形板革綴短甲は長方板革綴短甲に先行する、その系譜上にある形式と理解されることがわかる。そしてそれは、最新の出土例である鞍岡山3号墳出土短甲が発見されたことでより有力になったといえる。

一方、長方板革綴短甲の最古形式資料は少なく、資料が良好なものも多くない。鳥取県古郡家1号墳や大阪府盾塚古墳出土の長方板革綴短甲や橋本達也によって方形板革綴短甲から長方板革綴短甲と評された松林山古墳出土短甲などが、阪口英毅による型式分類の最古型式のⅠとして挙げられる。このうち、筆者自身は学生時代に盾塚古墳出土資料を実見する機会を得ており、帯金の有無に疑問を抱いていた。すなわち同資料に帯金がなければ、方形板革綴短甲の要素を有した長方板革綴短甲であり、方形板革綴短甲から長方板革綴短甲への変遷をより正確に把握できることを予察した。

そこで今回の調査では、①比較的新しい型式と推測した岐阜県船来山98号墳出土方形板革綴短甲、②最新型式であると推測する京都府鞍岡山3号墳出土方形板革綴短甲、③大阪府盾塚古墳出土資料の長方板革綴短甲の合計3例の実見調査を実施した。

(1) 船来山98号墳

船来山古墳群は、岐阜県本巣市(旧本巣郡糸貫町・本巣町)と岐阜市にまたがり所在する東海地方屈指の古墳群である。同古墳群は24号墳や26号墳、98号墳とみられるように古墳時代前期から古墳が造営され、中期古墳と理解される81号墳などを経て、後期以降に造墓活動が爆発的に急増するという特色がある。今回資料調査を行った船来山98号墳は全長約39m、後円部径23m、前方部最大幅18mを測る前方後円墳で、攪乱により詳細が不明な後円部の第1主体部と、前方部の第2主体部の合計2基の埋葬施設が確認されている。今回資料調査を実施した方形板革綴短甲(図1)は第2主体部からの出土である。第2主体部は割竹形木棺が納められており、短甲は「頭部側に鉄短甲を横位に置いて」副葬されていた。「横位」とは短甲を伏せた状態とみられる。その他の副葬品は、被葬者の推定胸部位置でガラス小玉2点、棺外で鉄剣1点、鉄鏃3点の出土が確認されている。

同古墳は方形板革綴短甲の年代観などから、古墳時代前期後半の築造と理解されているが、これはあくまで第2主体部の年代観であることは留意すべきである。

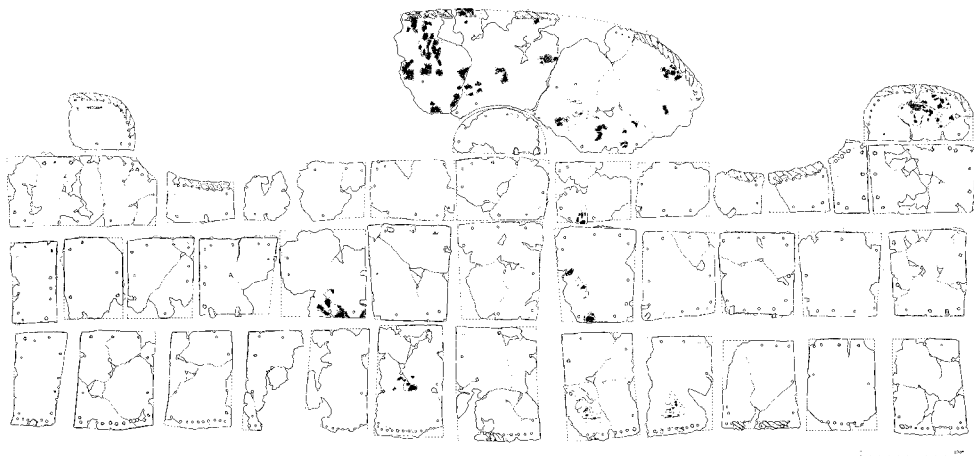


図1 船来山98号墳出土方形板革綴短甲展開図(吉田(編)1999を一部編集)

調査方法と成果 熟覧や写真撮影、図化作業を行った。図面は報告書に掲載されていたため、特徴的な部位のみ図化を行った。同古墳出土方形板革綴短甲は、鉄板がおおむね遺存しており、鉄板どうしの重なり順が観察できると考えられた。また、本資料は後胴の押付板中央部が半月形に挟まれ、その隙間を埋めるごとく半月形の鉄板が1枚連接される。これを後出する形式である長方板革綴短甲の豎上第2段(地板)の萌芽的な要素と予察し、周辺の鉄板配置などを確認する調査を行った。

連接方法 観察の結果、後胴中央に関しては、上から順に、押付板→半月形鉄板→方形鉄板上段→方形鉄板中段→方形鉄板下段(裾板)と連接され、下段方向が内面に重ねられていくことが確認できた。

押付板 豎上第2段(地板)の萌芽と考えた半月形鉄板については、最上段の押付板が脇側まで左右に大きく曲面的に鍛造する必要があることから、中央下側をあえて切り取ることで鍛造の簡便化を図ったものとみられる。現状では、他の方形板革綴短甲にこのような形状の鉄板が存在しない(定着しない)理由は、短甲製作工人の鍛造技術の熟練度に起因するものと理解するに至った。

(2) 鞍岡山3号墳

鞍岡山3号墳は京都府相楽郡精華町大字下狛小字大福寺・長芝に所在する古墳で、平成15年度から22年度にかけて精華町教育委員会によって発掘調査された。平成15～16年度の第1次調査では墳丘周囲に瓢箪形の鳥状遺構が検出される点も注目される。墳形は一段築盛で基底部での直径は約40mである。主体部は墳頂部で2基が確認されており、南北に主軸を持つ第1主体部からは今回資料調査を行った方形板革綴短甲(図2)を含め、鉄製武器や農工具が副葬されていた。同主体部は盗掘を被っていることから、他にも副葬品が納められていたことがわかる。その墳丘の規模・形状や副葬品から、古墳時代前期末から中期初頭にかけて築造された古墳の1つと考えられ

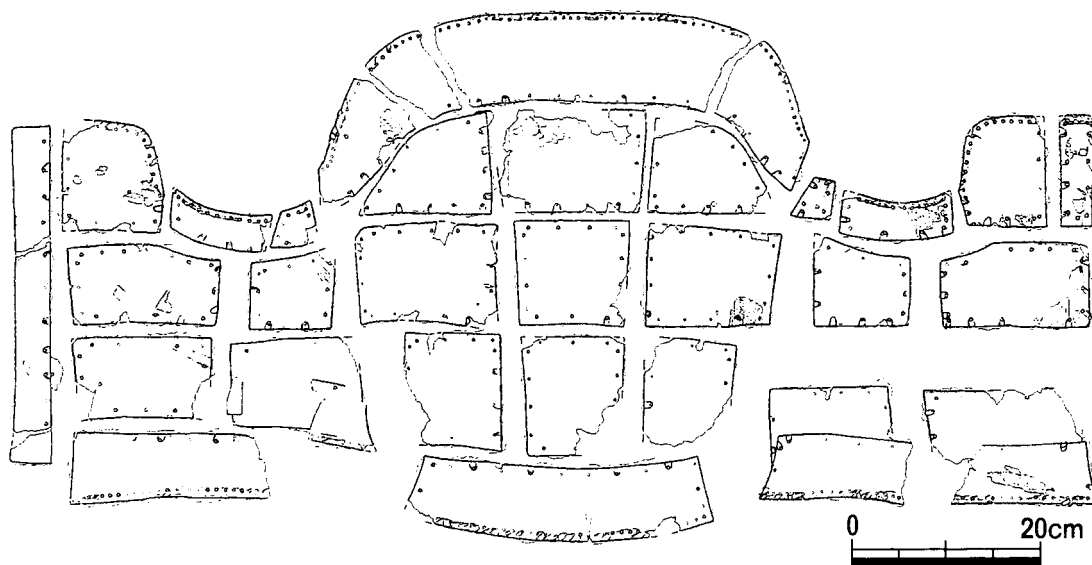


図2 鞍岡山3号墳出土方形板革綴短甲展開図(大坪2011より引用)

る。

同古墳の発掘調査結果は成果報告が行われているが、遺物個別の報告はわずかに触れられている程度である。^(注19)

調査方法と成果 時間の制約上、鉄板どうしの重ね順などの熟覧を中心に行った。

鉄板の構成 同短甲は押付板8枚、上段鉄板3枚、中段鉄板7枚、下段鉄板7枚、裾板3枚、引合板は左前胴のみの1枚で構成される。なお、右前胴の押付板や中段鉄板に穿孔が認められることから引合板の存在が予察されたが詳細は不明である。

押付板 押付板は後胴が1枚で構成される。その形状はもはや次形式の長方板革綴短甲の押付板そのものである。左前胴側の押付板は正方形に近い形状である。右前胴の押付板は細長い鉄板と方形状の鉄板の2枚で構成される。左右の枚数の差異は、おそらく幅の調整の結果2枚に分割されたものと推測する。脇部に配される鉄板は左右で各2枚の計4枚。特に後胴側の鉄板が小さいことが顕著である。脇部分では三次元的な加工・調整が必要とされるため、部材を細かく配することでそれを解決したものと推測する。

裾板 裾板は全体的に縦幅が小さく、上段に接して配される下段鉄板よりも幅狭である。裾板の幅が短い理由は、本例が裾板の初出例と仮定すれば、下段地板から独立して間もないためと推測することもできる。本例を除き方形板革綴短甲には裾板が存在しない。

鉄板の形状・構成 左右で対称となる部材は、原則縦幅が等しい。本短甲は少なくとも縦幅に関しては左右対称を意識して製作されたと理解でき、金属加工技術が一定の水準に達した結果と考えられるのではないかと。後胴の中央部分を観察した結果、縦幅が、下段鉄板＞中段鉄板＞上段鉄板＞押付板＞裾板と徐々に狭くなる。また、これら鉄板の上辺と下辺どうしは対等でなく、わずかに逆台形を呈する。また、上段の下端部幅と中段の上端部幅、中段の下端部幅と下段の上端部幅も長さが揃わない。特に前者の差は著しい。製作時の縦方向を揃えていく意識よりも、まず横方向への鉄板の接続の意識を優先させた結果と理解する。これは新形式の方形板革綴短甲にみられる、同段どうしの接続を先行して製作するという特徴とも矛盾しない。

(3) 盾塚古墳

盾塚古墳は大阪府藤井寺市にかつて所在した全長88m、墳丘長73m、前方部幅25m、長さ16.4m、後円部径59mを測る、造出しを有する帆立貝式前方後円墳である。同古墳は古市古墳群の誉田御廟山古墳(伝応神陵古墳)の北東約200mに位置している。関西大学文学部教授(当時)の末永雅雄により調査が実施され、埋葬施設は長大な割竹形木棺を内包する粘土槨で、古墳名の由来となった漆塗り革盾や武器、武具といった5世紀、ひいては古墳時代中期を代表する副葬品が出土した一方で、石釧や筒形銅器などの古墳時代前期を想起させる副葬品も多く出土した。副葬品の年代観などから、現在同古墳は古墳時代中期、5世紀第1四半期に位置づけられる。調査終了後、出土遺物は紆余曲折を経て関西大学文学部考古学研究室に一括で所蔵され、四半世紀以上が経過した後、報告書『盾塚・鞍塚・珠金塚古墳』が刊行され、今回実見した短甲2領についても文章、

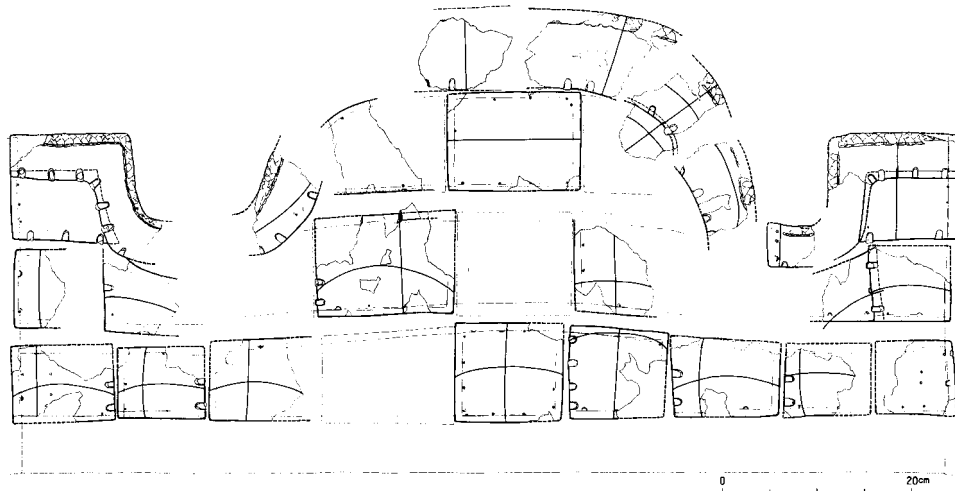


図3 盾塚古墳出土長方板革綴短甲展開図(末永(編)1991を一部改変)



写真1 盾塚古墳出土短甲の裾板(帰属不明)



写真2 盾塚古墳出土長方板革綴短甲(右前胴)

図面、写真が報告されている。

資料調査を行った長方板革綴短甲(図3)は、棺内中央、被葬者の足側から少し離れて出土したのだが、隣に三角板革綴短甲や三角板革綴衝角付冑、さらには頸甲や肩甲といった多くの武具もまとめて副葬されていた。このため、細片化した甲冑片は一括で回収されたものとみられ、一部は未だ三角板・長方板革綴短甲のどちらにも同定されずに未整理となっている。

同報告書の図面においては帯金や裾板が掲載されておらず、その有無についても詳細は不明とされていた。一方で、写真図版には一部引合板らしき鉄板が掲載されているなど、混乱もみられる。本資料に帯金や裾板が真に存在しないのであれば、同資料は長方板革綴短甲の前段階の所産である方形板革綴短甲の要素を色濃く残す、型式変化的にみて重要な資料となる可能性がある。そこで、今回の資料調査では、長方板革綴短甲および隣接して出土した三角板革綴短甲を実見し、帯金などの部材の混同を再精査するべく長方板革綴短甲の鉄板の構成を確認した。

調査方法と成果 限られた制限下にあつて、全ての接合検討を行うことができなかったため、はじめに、①現在判明している長方板革綴短甲・三角板革綴短甲の部材を展開図上に置き、確実に遺存する部位の確認を行った。次に、②細片化している未整理扱いの破片資料を観察・整理し、

部位の同定を行った。③これらを先の展開状態の資料の中で遺存しない部位に当てはめて、長方板革綴短甲・三角板革綴短甲のどちらかであることを確認した。また、関西大学米田文孝教授の許可を得て、同定ができた資料に関しては一部接合を行った。以下、部位ごとに観察知見を列挙する。

帯金 帯金に関しては、三角板革綴短甲には前胴・後胴ともに豎上第3段、長側第2段に帯金が配され、長側第2段は前胴と後胴の帯金どうしが直接接続される。一方、長方板革綴短甲には豎上第3段、長側第2段に帯金が配されるが、前胴の豎上第3段に関しては存在しないものが多い。以上から両者で多くの帯金が存在すると予察した。予察のとおり、後胴の長側第2段などは全体の形状が判明する程度には整理が進んだが、これらに他の地板が銹着するものが全く無いことから、帯金がどちらの短甲に属するかは結論がでなかった。

裾板 調査の結果、ほぼ完存する後胴側の裾板を含む、1領分の裾板が確認できた(写真1)。ただし、上段の地板と銹着するものなく、長方板革綴短甲と三角板革綴短甲のどちらに属するかは結論がでなかった。また、現在のところ長方板革綴短甲の最下段である長方形地板(長側第3段)は実見の結果、覆輪を施していないことがわかった。最下段が長方形の鉄板である通有の方形板革綴短甲でも、最下段には必ず覆輪を施すことから、本資料には裾板もしくはそれに代わる鉄板が別にあったとみられる。

引合板 長方板革綴短甲・三角板革綴短甲ともに前胴左右の部位を確認できた(写真2)。よって、長方板革綴短甲には左右ともに引合板が存在することになる。

以上の結果から、盾塚古墳出土の長方板革綴短甲には引合板が確実に存在するが、帯金に関しては、存在を認めることができなかった。裾板に関しても確定的ではないが、裾板の上段に位置する地板に覆輪の痕跡が認められないことから、本来は裾板もしくはそれに近い何かが存在していたものと推測される。

4. まとめ

今回、方形板革綴短甲と長方板革綴短甲の新旧の属性が折衷する鞍岡山3号墳と、初期の長方板革綴短甲の代表例である盾塚古墳出土例を中心に調査を行った。

調査の結果、後者には帯金が存在しないことを結論付けることができなかった。革綴短甲の系譜を語るうえで本短甲は重要な資料であり、今後も継続して精査を加え、その位置づけを明確にしたい。

また、鞍岡山3号墳出土の短甲には、①帯金が存在せず、それに関連して鉄板の上下幅が長方板革綴短甲のそれと比べても大きいほかに、②左右の押付板が複数枚で構成されることも特徴として挙げられる。阪口が指摘するように、方形板革綴短甲の同一形式内での改良から発展して帯金式短甲が出現すると理解すると、典型的な初期の長方板革綴短甲にいたるまでには、①・②のどちらが改良され、さらに1段階長方板革綴短甲に近似する型式が存在する可能性も浮上する。今後のさらなる資料の増加を持って検討を加えたい。

資料調査に際しましては、以下の方々、団体にご協力を得ました。厚く御礼申し上げます。

恩田知美、米田文孝、村川俊明、渡邊貴亮、関西大学文学部考古学研究室、精華町教育委員会、
本巢市教育委員会(順不同、五十音順)

(ふじい・ようすけ＝大阪府教育庁文化財保護課・元当調査研究センター職員)

(いが・たかひろ＝当調査研究センター調査課企画調整係主査)

- 注1 橋本達也「四、五世紀における韓日交渉の考古学的再検討－地域間相互交流の視点から 第三章 竪
矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」(『青丘学術論集』第12集 財団法人 韓国文化研究振興財団)
1998。
- 注2 古谷 毅「方形板革綴短甲の基礎的研究(1)」(『東京国立博物館紀要』第41号 東京国立博物館)
2006、前坂尚志「方形板革綴短甲を有する宇智の前期古墳「大墓」」(『奈良県立橿原考古学研究所附
属博物館 特別展図録 吉野川紀行－吉野・宇智をめぐる交流と信仰－』五條市・五條市教育委員会・
吉野町・吉野町教育委員会)2009。
- 注3 古谷 毅「古墳時代の甲冑研究の方法」(『考古学雑誌』第81巻 第4号 日本考古学会)1996。
- 注4 末永雅雄『日本上代の甲冑』岡書院 1934。
- 注5 末永雅雄『日本上代の甲冑』(増補)木耳社 1994。
- 注6 野上丈助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」(『考古学研究』第14巻 4号 考古学
研究会)1968。
- 注7 小林謙一「甲冑制作技術の変遷と工人の系譜(上)」(『考古学研究』第20巻 4号 考古学研究会)
1974、小林謙一「甲冑制作技術の変遷と工人の系譜(下)」(『考古学研究』第21巻 2号 考古学
研究会)1974。
- 注8 滝沢 誠「狐塚古墳出土の短甲」(『茨城県史研究』64号 茨城県教育委員会)1990。
- 注9 伊賀高弘「瓦谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第46冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
1991。
- 注10 橋本清一・小林謙一・伊賀高弘「古墳時代前期の鉄製甲冑の復原－京都府木津町瓦谷古墳出土の小
札革綴冑・方形板革綴短甲－」(『考古学と自然科学』第27号 日本文化財科学会)1993。
- 注11 高橋克壽「四世紀における短甲の変化」(『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館)1993。
- 注12 注1に同じ。
- 注13 古谷 毅「例会報告 古墳時代の甲冑研究の方法(第42回例会発表要旨)」(『考古学雑誌』第76巻
第1号 日本考古学会)1990、注2に同じ。
- 注14 橋本達也「古墳・三国時代の板甲の系譜」(『技術と交流の考古学』同成社 2013)
- 注15 阪口英毅「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲：変遷とその特徴」(『史林』第81巻 第5号 史学研
究会)1998。
- 注16 阪口英毅「前期・中期型甲冑の技術系譜」(『考古学ジャーナル』(581・1月号)ニューサイエンス社)
2009。
- 注17 大坪州一郎「京都府精華町 鞍岡山3号墳の調査」(『考古学研究』第58巻 第1号 考古学研究会)
2011。
- 注18 注14に同じ。
- 注19 注16に同じ。

【参考・引用文献】

- 大江克己・植村明男・西山要一・村川俊明「京都府精華町鞍岡山3号墳出土短甲の構造復元」(『日本文化財科学会大会研究発表要旨集』日本文化財科学会) 2012
- 小林謙一「古墳時代における初期の甲冑」(『文化財論叢Ⅱ』奈良文化財研究所創立40周年記念論文集 奈良文化財研究所) 1995
- 小林謙一「古墳時代甲冑の系譜と木甲」(『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集 奈良文化財研究所) 2002
- 阪口英毅「帯金式甲冑の成立」(『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』真陽社) 2010
- 末永雅雄編『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会 1991
- 高橋 工「東アジアにおける甲冑の系統と日本ー特に5世紀までの甲冑製作技術と設計思想を中心にー」(『日本考古学』第2号 吉川弘文館) 1995
- 橋本達也「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」(『雪野山古墳の研究 考察篇』八日市市教育委員会) 1996
- 吉田英敏(編)『船来山古墳群』糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会(船来山古墳群発掘調査団) 1999

平成 29 年度発掘調査略報

3. つきで 月出遺跡

所在地 京丹後市網野町浜詰月出

調査期間 平成29年10月17日～12月22日

調査面積 500㎡

はじめに 今回の調査は国道178号防災・安全交付金業務委託に伴い京都府丹後土木事務所の依頼を受けて実施した。月出遺跡は京丹後市網野町浜詰月出に所在し、日本海沿岸部に形成された砂丘上に立地している。遺跡範囲内に石造物の散布が確認され、中世以降の墳墓と考えられている。過去に調査例はなく、本調査が1次調査となる。

調査概要 今回の調査地は遺跡範囲の北側に位置する。調査トレンチは西側の丘陵部に1トレンチから3トレンチ、東側の旧耕作地に4トレンチと5トレンチの5か所を設定した。

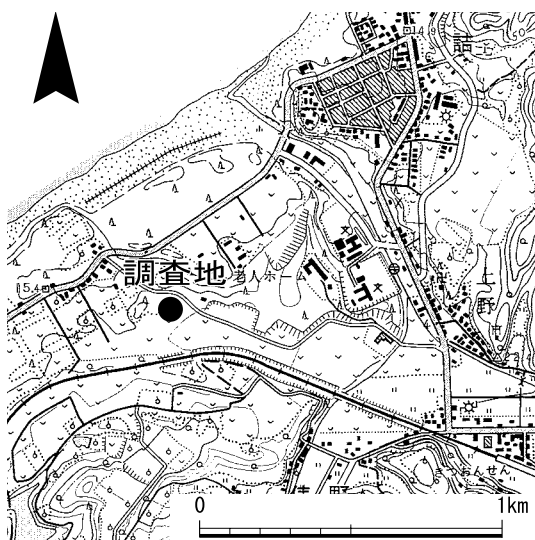
1～3トレンチ 現地表面の標高は22.3mから25.3mで比高は3mを測る。表土直下より微細な貝殻片が混じるにぶい黄色砂層を検出した。水平、斜め方向の1～3mmの薄い葉理の重なりが確認できるが、層理面を形成しない単層の砂層である。3トレンチ西側を標高17.1mまで重機により掘削したが、砂層の土色変化が確認できたのみで、遺構、遺物は認められなかった。

4・5トレンチ 現地表面の標高は22mから21.9mで比高は0.1mを測る。表土直下より旧耕作土であるにぶい黄色砂層を検出した。旧耕作土の下層では、垂円礫、垂角礫が混じる斜めの不整合な砂層堆積が連続しており、人為的な改変を受けたと考えられる。4トレンチ東側の標高19m付近で花崗岩の礫が混じる固く締まった灰色砂層を検出した。標高17.5m付近まで掘削を行った

が、土層の変化は確認できなかった。いずれのトレンチからも遺構、遺物は認められなかった。

まとめ 今回の調査では調査地東側の1～3トレンチは近隣の海浜からの飛砂による風成堆積により形成された砂丘であることが判明した。調査地西側の4、5トレンチでは過去に大規模な土取りが行われており、土取り後の埋め戻しと考えられる。

(福山博章)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 久美浜)

4. 女布遺跡^{によ}

所在地 京丹後市久美浜町女布黒田

調査期間 平成29年6月1日～7月28日

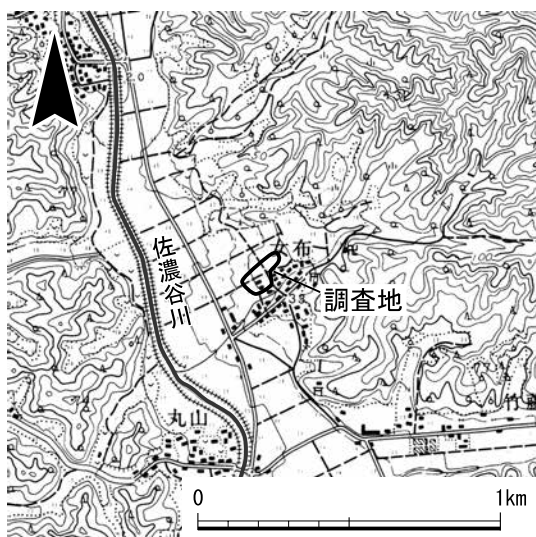
調査面積 500m²

はじめに 女布遺跡は、佐濃谷川中流域右岸に形成される扇状地上に立地する。昨年度調査では、部分的ではあるが弥生時代後期の竪穴建物2基を確認している。

今回は昨年度に引き続き、府営農業競争力強化基盤整備事業に伴い、京都府丹後広域振興局の依頼を受け、発掘調査を行った。

調査概要 調査対象地内に5か所のトレンチ(1～5トレンチ)を設定した。北東側に設定した1・2トレンチは、顕著な削平を受けており遺構の残存状況は悪い。平安時代の柱穴や溝の一部を検出したほか、南東付近にて谷地形を確認しており、埋土中から弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器が出土した。

現況の女布集落北端部付近に設定した3・4トレンチでは、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器を含む遺物包含層が約0.15m残存する。遺構面では、古墳時代の竪穴建物(SH401・402)や平安時代の土坑等を検出した。SH401は検出長3mを測る方形の竪穴建物である。周壁溝と炉跡の可能性のある焼土を検出したが、遺物は確認できなかった。西端の標高28.0m付近で検出したSH402は検出長4.8mを測る。平面形は検出範囲が狭く判然としない。床面より周壁溝や主柱穴の可能性のある柱穴1基を確認した。遺物は土師器等が出土しており、竪穴建物の時期は古墳時代初頭と考えられる。同じく床面付近から、0.3～0.4m大の不整形の白色粘土塊を複数確認した。平安時代の土坑は長軸0.5～3.5mを測る不整円形のものを数基検出した。



調査地位置図(国土地理院 1/25,000 久美浜)

西側の5トレンチでは、遺構は確認できず、シルトや礫で構成される自然堆積層を確認した。

まとめ 今回の調査地周辺の遺跡や丘陵上の調査でも、近接する時期の遺構や古墳を確認しており、今後これらとの関連を考えていく必要がある。また、遺物包含層と遺構・遺物の検出状況から、現況の女布集落付近に古代の集落が広がっている可能性がある。

(荒木瀬奈)

5. ^{しばやま}芝山遺跡第17次(G・H地区)

所在地 城陽市富野中ノ芝

調査期間 平成29年4月17日～8月25日

調査面積 1,335㎡

はじめに 芝山遺跡は城陽市の東半部を占める丘陵の西端に位置し、これまでの調査で中・後期の古墳や奈良時代の掘立柱建物などがみつっている。今回の発掘調査は新名神高速道路整備事業に伴い西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。今事業で発見された古墳は、既往の調査も含めて立地等による群別作業を改めて行っており、本誌もその古墳番号を使用する。

調査概要

G地区 府道のすぐ西の段丘面上に位置する調査地で、円墳が3基みつかったD地区のすぐ南に位置している。G地区の北東側は、戦後の土砂採取で地形が大きく削平されている。改変で生じた崖面では溝が観察されており、『城陽市史』では古墳が存在する可能性が示されている。

15号墳 周溝の内法で測って径26.7mの円墳である。土砂採集による削平のため、残存していたのは全体の2/3程度である。周溝は幅2.3～3.7m、深さ0.7～1mで、飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した。埋葬主体や盛土は残存していなかった。『城陽市史』に示された古墳にあたる。

H地区 段丘面の西端にあたる位置で3つの調査区を設定した。H-1区は、土砂採集のため幅10m×長さ80mの半島状に残された段丘の西端にある、古墳状地形に設定した調査区である。

16号墳 幅0.7～2.6m、深さ0.25～0.8mの周溝を長さ16.5m分検出した。検出したのは古墳の北西部のごく一部分で、その他は土砂採取により大きく削平されているため墳形や規模は不明であるが、径20m程度の円墳の可能性はある。埋葬主体は見つからなかったが、旧表土上に盛土が

なされている状況が確認できた。周溝埋土からは飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した。

H-2・3区はH-1区のすぐ北に位置し、段丘に対して東から入り込む谷部に設置した調査区であるが、自然の谷地形を確認したのみで遺構はみつからなかった。

まとめ 今回の調査では2基の古墳がみつかった。周溝埋土からは飛鳥時代の遺物が出土しているが、既往の調査例からこれは埋没の年代の一点であり、6世紀代の年代が想定できる。とくに15号墳は周辺の円墳に比べて規模が大きく、その被葬者像も含めた分析が今後の課題である。(加藤雅士)



調査位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

こひじり 6.小樋尻遺跡第3次

所在地 城陽市富野小樋尻地内

調査期間 平成29年5月2日～7月26日

調査面積 803m²

はじめに 今回の発掘調査は新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した。小樋尻遺跡は東に芝山遺跡、西に水主神社東遺跡があり、城陽市のほぼ中央部に位置する。

小樋尻遺跡周辺の発掘調査では、集落の縁辺部の溝や条里地割の区画溝、平成29年度の城陽市による調査では縄文・古墳時代の堅穴建物、古墳時代の掘立柱建物等の遺構が検出されており、縄文時代から奈良時代の遺物が出土している。

調査概要 調査地は、国道24号新池交差点の南西に位置し、小樋尻遺跡の北東端にあたる。

現地表・旧表土の下0.2mのシルト層上面で1辺約2mの方形の近代の土坑を複数検出した。シルト層は0.4m厚で堆積しており、この層中には、葦・ヨシの痕跡が認められた。その下層では、1.8mに渡って岸辺の波打った跡と判断される黄褐色に酸化した層、さらにその下層では沼状の水性堆積を表すシルト層の堆積や土砂流と判断される砂層や礫を含む層が認められた。土砂流とみられる溝状の痕跡からは、古墳時代・古代の土師器片が出土した。土砂流とは、急激な土砂の流れにより川底を削った痕跡である。この土砂流は、北東から南西に向けて流れており、流れの幅がせまくなっていることから、北東側の丘陵から流れ込んできた土砂流の先端と推測される。

まとめ 今回の調査では、近代の土坑、土砂流の痕跡を検出し、古墳時代から奈良時代の土師器片・須恵器片、中世の白磁片・宋銭などの遺物が出土した。土層の堆積状況から、小樋尻遺跡



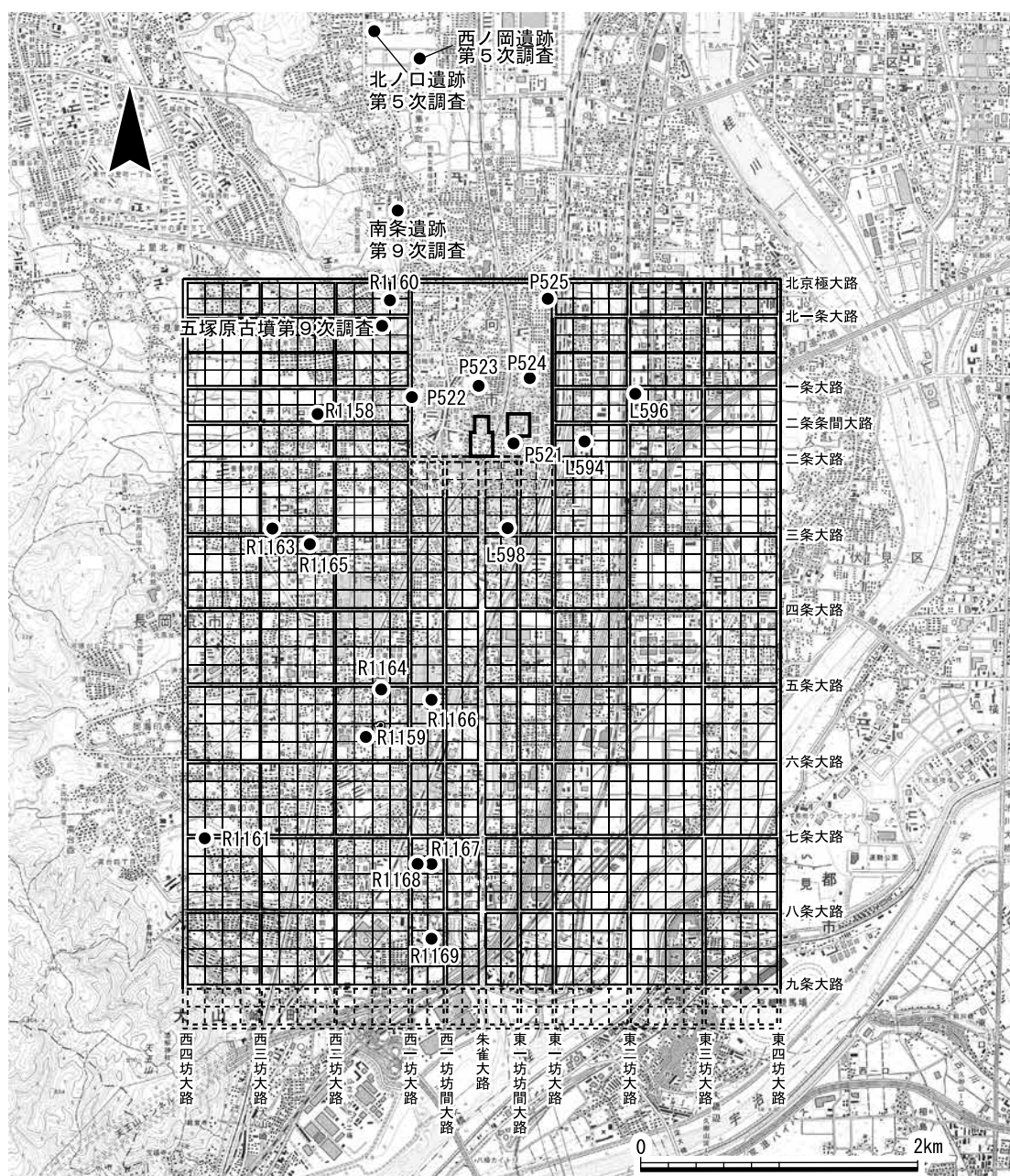
調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

の範囲とされる北東端には近世近くまで、水をたたえていた沼地もしくは湿地であるということが明らかとなった。しかも、比較的水深の深い環境から、水際、陸地へと変化したことが判明した。周辺の調査成果では、縄文・古墳・奈良時代の集落があり、人の生活域があったとされているが、近接する今回の調査地の場所に沼もしくは池があったことがわかり、その当時の地理的環境を知ることができる資料となった。また、近代以降には土坑状の遺構が掘削されるなどの土地利用が行われていたと考えられる。

(岡村美知子)

長岡京跡調査だより・129

長岡宮跡や長岡京跡は、京都市、向日市、長岡京市、大山崎町にまたがる遺跡のため、これらの自治体をはじめ、京都府、埋蔵文化財センターやなどがこれまで調査に携わってきた。一つの遺跡を多くの団体が調査をしてきたことから、発掘調査成果等に関する情報交換や、資料の共有化を図って、長岡京跡の統一的な調査・研究に資する必要性が生じてきた。そのため、毎月1度、長岡京跡を発掘調査している機関の担当者が集まって、長岡京連絡協議会を実施している。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京城、Lが左京城を示し、数字は次数を示す。

今回は、平成29年8月から平成30年1月の例会で報告のあった、宮域5件、左京域3件、右京域12件、京域外3件の合計22件のうち、主要なものについて報告する。

宮域 宮域の調査は、後期では4件実施された。西二坊大路の延長上に当たる第522次調査では、明確にはわからなかったが、その東側溝と関係する位置に柱穴が見つかった。

宮内北辺官衙東端に推定される第525次調査では、東一坊大路の西側溝が検出された。

左京域 左京域の調査事例は、前期に続いてやはり少なく、都合4件となった。第594次調査については、前号で詳細を記述した。その後、下層遺構の調査も実施され、古墳時代の土坑も確認された。その他、現在も調査の続いている調査地もあり、詳細は次号に譲りたい。

右京域 右京域の調査は、比較的調査規模の小さなものが多いものの、11件実施され、貴重な成果をもたらした。第1164次調査では、柵列が2条みついているが、出土遺物が僅少なため、明確に長岡京期のものと断定することができなかった。

第1165次調査では、中近世乙訓寺の寺域南限・東限に関わるとみられる溝と、古墳時代の総柱の掘立柱建物などがみつかった。推定三条大路南側溝は検出されなかった。

第1166次調査では、東・西・南の3か所の調査区で実施された。古墳時代から近世にいたる遺構・遺物が出土している。長岡京期に限れば、東調査区で直径約20cmの柱痕のある柱列がみつかった。今後隣接地区の調査などで、柵か掘立柱建物かの判断がなされるであろう。また、南調査区では、東西2間、南北2間以上の南北棟と思われる掘立柱建物がみつかった。同じ南調査区からは溝2条等もみついている。

第1167次調査では、長岡京期から平安時代にかけての小穴が8基、土坑1基、溝2条がみつかり、当該時期の須恵器・土師器などの遺物だけでなく、前期とみられる弥生土器碎片が出土している。

京域外 今回も、長岡京域の発掘調査に伴い、その上層遺構や下層遺構としての調査が多かった。その中で、京域外の調査として、北ノ口遺跡第5次調査と西ノ岡遺跡第5次調査、南条遺跡第9次調査が実施された。北ノ口遺跡の調査では、出土遺物として須恵器が出土したものの、明確な遺構がみつからなかった。

西ノ岡遺跡でも、縄文土器、古式土師器、須恵器、瓦器、陶器など、各時代にわたる遺物が出土しているが、顕著な遺構がみつからなかった。

その他 五塚原古墳の遺跡範囲確認調査が実施され、五塚原古墳の墳丘部のようすが明らかになってきた。前方部がバチ状を呈し、奈良県桜井市纏向古墳群中の東田大塚古墳とよく似ていることが判明した。墳丘は、東側と同じく、墳丘斜面の途中で兵站面を設ける二段築成であることがわかった。また、前方部の西側には周溝状の窪みがあり、その南東側に礫を敷いて可能性があることなど、貴重な成果が得られた。

(土橋誠)

現地公開状況(平成29年10月～平成30年 1 月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査をしている京都府内の遺跡の現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

現地見学会

1月13日(土)に八幡市男山東中学校校区学校支援地域を対象に美濃山遺跡の現地見学会を実施した。小中学生や地元の方が130名以上の参加者を得た。

現地説明会

1月20日(土)に亀岡市佐伯遺跡の現地説明会を実施した。佐伯遺跡では、多量の瓦が出土しており、その中には、綾部市綾中廃寺出土の瓦と同範の瓦が多く出土していることから、綾中廃寺の瓦製作工人の移動、または強い繋がりがあった可能性がある。またそのほか、信仰の対象であり、京都府下で3例目となる瓦塔が出土したことから、寺院であると考えられる。今回の調査は、丹波地域における仏教の広がりを探る上で重要な調査となった。

当日は、152名が参加され、遺構や遺物を熱心に見学された。



佐伯遺跡現地説明会

1月21日(日)に八幡市美濃山遺跡の現地説明会を実施した。美濃山遺跡では、弥生時代から古墳時代の竪穴建物、奈良時代の掘立柱建物、時期不明の鍛冶炉の跡などを検出した。今回の調査では、美濃山丘陵上の広い範囲に集落が営まれていたことが判明した。

当日は、125名の方が参加され、出土した遺構や遺物について積極的に質問された。

(菅博絵)



美濃山遺跡現地説明会

普及啓発事業(平成29年10月～平成30年 1 月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

関西考古学の日2017「秋の考古学講座」

「関西考古学の日」は、今年で10年目を迎える全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックに所属する13法人が、広く市民の皆さんに文化財や考古学の重要性などを知っていただくために、7月から11月の5か月間に考古学に関連した行事を実施する連携事業である。

当調査研究センターでは、「秋の考古学講座を」を3回実施した。9月2日(土)に小池寛調査課長が「軽石の考古学」と題した講演を実施し、17名の参加を得た。10月7日(月)に「縄文土器の文様を復元する(復元体験)」と題した体験講座を実施し、15名の参加を得た。11月4日(土)に「軒瓦の文様を読み解く」と題した講演をを実施し、13名の参加を得た。参加者は興味深く聴講し、講義終了後は積極的な質問があった。詳細は本誌30頁にて紹介する。

2017向日市まつり

11月18(土)・19(日)に京都向日町競輪場にて開催された向日市まつりに「伝統の網代編みに挑戦しよう!」と題して出展した。

縄文時代から編まれてきた網代網の歴史を学んでいただき、実際に梱包用の紐で網代網のコースターづくりの体験講座を実施した。

当日は小さなお子さんからご年配の方まで幅広い年代の方が参加された。参加者は、出土した縄文時代の籠の写真や、土器の底部の編み物の圧痕から、縄文時代には、多くの編み方があることに感心された。

コースターづくりでは、紐の通し方に苦戦される方もいたが、保護者や、友人と助け合いながら、コースターをつくられた。完成したコースターは、持ち帰っていただいた。

当日は厳しい寒さに見舞われたが、両日含め、107名の参加を得た。



コースター作成状況

第136回埋蔵文化財セミナー

11月26日（日）京都市イオンモール京都桂川3階イオンホールにて第136回埋蔵文化財セミナーを開催した。

今回のセミナーでは、「秀吉の城づくりと町づくり ～秀吉の目指した首都とは～」と題し、豊臣秀吉が京都の町並みを大きく変化させたようすを、近年の発掘調査の成果と最新の研究成果

から京都の姿に迫った。

基調講演「秀吉の城づくりと町づくり ～秀吉の目指した首都とは～」では、同志社大学鋤柄俊夫教授が、秀吉の都市計画は、慶長・伏見の大地震の後に大きな変化があったことを講演された。

報告1「寺町の形成とその意義」では、当調査研究センター綾部侑真主任が、寺町・旧域法成寺跡の発掘調査から、寺院の敷地利用が明らかになったことが報告された。

報告2「ここまでわかった御土居の実像」では、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所南孝雄調査係長が、御土居の築造方法に規格性が認められることから、統一的な制作方法のもとに築造された可能性を報告された。

報告3「発掘調査と地表探査から迫る聚楽第の姿」では、京都府教育庁指導部文化財保護課の古川匠副主査が、従来の発掘調査成果と地表探査成果から、聚楽第の姿やその移り変わりを報告された。

ミニシンポジウムでは、各発表テーマから問題提起をし、意見交換が行われた。

当日は、京都府内外から139名の方が参加され、盛況のうち終了した。

（菅博絵）



第136回埋蔵文化財セミナー展示見学風景



第136回埋蔵文化財セミナー講演風景



第136回埋蔵文化財セミナーミニシンポジウム風景

軽石の考古学

小池 寛

1 地域差が著しい軽石の用途

奈良国立文化財研究所データベース「全国遺跡報告総覧」で「軽石」を検索すると4,050件のデータが表示される。特に、長野、宮崎、群馬県に検索数が集中し、東北各県にも一定の検索数が見られる。いずれも火山近くに位置しており、古くから噴出物としての軽石が、生活圏内に存在し、軽石を身近な石材として容易に入手することが可能であったことを示している。その中であって鹿児島県と宮崎県では、縄文・弥生時代の石偶や宗教的遺物、土器の支脚、古墳時代の轆羽口や石棺、中世の石像物や近世の偶像などに多用されていることが把握される。一方、近畿では出土点数は少ないが、浮子に使用された事例が見受けられる。軽石は、畿内内陸部において採集できないことから、他地域からの搬入を想定する必要がある。江戸時代の各地の特産物を網羅した『毛吹草』によると、紀伊の特産物として軽石が記載されていることから、海岸の漂着物として軽石が採集されたことを前提として、採集調査を行った。

2 畿内周辺域における軽石採集域の特定調査

和歌山県沿岸において漂着物としての軽石採集調査を行った。その結果、和歌浦海岸をはじめ浜の宮、女浦、野島、津井、鹿島、二子浜、南白浜、志原、しおかぜ、白鳥、串本町須賀の浜海岸において大小の軽石を多数採集することができた。このことから、内陸部における軽石の採集地は、これらの海岸である可能性が高いことを『毛吹草』の記事などから推定した。

3 古墳時代中期における交易品としての軽石

古墳時代中期に渡来人の足跡を多く残す集落遺跡では、朝鮮半島の陶質土器をはじめ、陶邑産の須恵器や大阪湾岸や紀淡海峡の製塩土器、緑色凝灰岩や滑石の原石や製品、琥珀、砥石などの交易品とともに馬歯、轆羽口、鉄滓、甑などが数多く出土する。特に、畿内政権直轄の土器製塩工房である西ノ庄遺跡の製塩土器や紀ノ川流域の滑石は、紀伊からもたらされた交易品として位置づけられる。出土事例が僅少ではあるが、畿内内陸部の古墳時代中期集落遺跡から出土した軽石は、以上の太平洋岸において採集され、製塩土器や滑石とともに紀伊から交易によってもたらされたと考えられる。なお、近年、日本海域の弥生～古墳時代集落からも軽石が出土しているが、日本海沿岸での採集との関連を想定できる。



古墳時代中期の交易を物語る様々な遺物
(精華町森垣外遺跡)

縄文土器の文様を復元する（復元体験）

菅 博絵

1. はじめに

明治12(1878)年にE. S. モースによってその存在が認識された縄文土器は、多種多様な文様を施した土器が存在する。しかし、どのように土器に施文を行ったかは、謎に包まれていたが、昭和6(1931)年に山内清男によって、縄による回転施文であることが明らかになると、文様の研究は急速に進んでいった。今回は、麻紐を使用して、撚り糸を造っていただき、粘土に押しつけることによって、縄文の復元体験を行った。

2. 縄文土器の文様－縄文原体－

一言に縄文土器と言っても、その施文方法は様々である。縄を直接土器に回転させて施文する縄文、軸棒に縄を巻き付けて施文する撚り糸文、彫刻された棒を回転させて施文する押型文、細い管状の道具を使用して施文する竹管文、貝殻を使用して施文する貝殻文、そして文様を持たない無紋土器など、縄文土器と名づけられているが、縄文で施文される土器は少ない。

縄文土器の簡単な紹介をし、縄文の撚り方を説明した後は、麻紐を用いて実際に縄文原体の復元を行った。両手に麻紐の端を持ち、撚りかける。次に撚った紐を半分におり、縄を作った。撚りの方向によって、縄が左上から右下に傾く左撚りと右上から左下に傾く右撚りの縄ができ、縄を粘土に押しつけると、実際の縄とは反対の文様となった。



写真1 製作した縄文原体で粘土に文様をつける

体験された方は、最初は、単に縄をねじるだけでは、紐がうまく寄り合わなく、紐がほどけて苦戦される方が多かったが、撚り方がわかると2段、3段の縄の縄文原体を作られた。

3. おわりに

講座終了後に会場に展示した長岡京市伊賀寺遺跡出土の縄文土器を見学され、縄文土器の大きさや文様の複雑さに感嘆されていた。

製作した縄文原体は、各自で持って帰られ、撚り糸を作れるようになりたいと、麻紐を持って帰られる方もいた。



写真2 伊賀寺遺跡から出土した土器を見学

軒瓦の文様を読み解く

筒井崇史

1. はじめに

瓦は、中国の西周時代(紀元前11～紀元前8世紀)に出現し、戦国時代(紀元前4世紀)から漢代(紀元3世紀)にかけて屋根全体に瓦が葺かれるようになった。

わが国への瓦の伝播は、6世紀末に日本で最初の寺院、飛鳥寺が造営された時である。「これ以降、日本国内でも瓦の生産が始まり、当初は寺院を中心に、7世紀末ごろには瓦葺きの大極殿などを備えた藤原宮が造営され、以後、宮都や寺院、官衙などで瓦の使用が広がる。

2. 軒瓦の文様を読み解く

今回は様々な瓦の中でも、軒丸瓦を取り上げ、その文様を読み解いた。ここでは、紙面の都合で軒丸瓦のみを取り上げる。

さて、初期の軒丸瓦は、朝鮮半島の百済から伝わったため、百済のそれによく似た文様のものである。文様の主体は、ハスの花をモチーフにした「蓮華文」である。「蓮華文」は、その後の「花卉」の形状の変化によって、「素弁」、「単弁」、「複弁」の3種類に分けられる。

朝鮮半島から伝わった当初は、「素弁」蓮華文が用いられた。軒丸瓦の周囲(=外区、これに対して花卉の中心文様部分を内区という)には文様等は見られない。これらが飛鳥寺をはじめ、初期の寺院を中心に用いられた(図第Ⅰ期)。

7世紀中頃になると、「単弁」蓮華文(図第Ⅱ期)が7世紀後半になると、「複弁」蓮華文(第Ⅰ図第Ⅲ期)が出現する。これらの軒丸瓦では、街区に「重圏文」や「鋸齒文」などの文様が付加される。こうした軒丸瓦は7世紀末になると、藤原宮で使用されることから、「藤原宮式」と呼ばれる軒丸瓦に発展する(図第Ⅳ期)。

3. おわりに

瓦のうち軒丸瓦は、おもにハスの花をモチーフとした蓮華文の変化から、その変化を読み取ることができる。軒丸瓦や軒平瓦では、文様や製作技術を見ていくと、同一の技術等に基づく系列の抽出ができる。軒瓦の文様は、こうした系列を考える上で、最もわかりやすい要素の1つで、その変化を追いかけることで、どのような文様のグループが日本のどこへ広がったのか追跡することができる。

このように軒瓦の文様を読み解くことは、軒瓦の広がり进行研究する上で重要な作業となるものである。

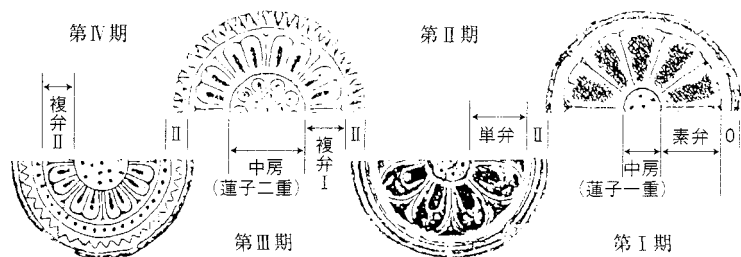


図 軒丸瓦の変遷(7世紀)

(岡本東三『古代寺院の成立と展開』山川出版社 2002より引用)

平成29年度のセンターの組織

センターの動向

(平成29年3月～平成30年1月)

月	日	事項
10	7	関西考古学の日2017 秋の考古学講座 「縄文土器の文様を復元する(復元体験)」(参加者15名)
	16	平成28年度共同研究成果報告会(都出理事)
	25	長岡京連絡協議会
11	1	水主神社東遺跡(城陽市)調査開始
	4	関西考古学の日2017 秋の考古学講座 「軒瓦の文様を読み解く」(参加者13名)
	16	平成29年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於:名古屋市～17日)
	18	向日市まつり「伝統の網代編みに挑戦しよう!」(参加者33名)
	19	向日市まつり「伝統の網代編みに挑戦しよう!」(参加者74名)
	21	上野遺跡(京丹後市)関係者説明会
	22	第32回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議 (於:長岡京市) 長岡京連絡協議会
	30	平成29年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会第2回役員会 (於:東京都、～12月1日)
12	1	平安京跡(府警本部)遺跡検討会
12	4	上野遺跡(京丹後市)現地調査終了(8月21日～)
	6	三日市遺跡(亀岡市)現地調査開始(～1月24日)
	20	第25回理事会(於:ルビノ京都堀川) 長岡京連絡協議会
	22	月出遺跡(京丹後市)現地調査終了(10月17日～)
	25	阿良須遺跡(福知山市)現地調査終了(8月22日～) 現地作業・整理作業年内終了
1	13	美濃山遺跡見学会(参加者130名)
	20	佐伯遺跡(亀岡市)現地説明会(152名参加)
	21	美濃山遺跡(八幡市)現地説明会(125名参加)
	24	長岡京連絡協議会
	31	第2回埋蔵文化財担当職員等講習会開催 (於:福岡市、～2月1日)

編集後記

春霞がただよう季節となりました。ここに『京都府埋蔵文化財情報』第133号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、府内で実施した発掘調査・普及啓発事業の成果報告をいちはやくお伝えするとともに、平成28年度に終了した当調査研究センター職員による共同研究事業の研究報告、さらに関西考古学の日関連事業「秋の考古学講座」の概要を掲載いたしました。

ご味読いただければ幸いです。

(編集担当 菅 博絵)

京都府埋蔵文化財情報 第133号

平成 30 年 3 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



印刷 中西印刷 株式会社

〒 602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル

Tel 075-441-3155(代) Fax 075-417-2050



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER